

国体委員会報告

西原 斗司男

【第 75 回鹿児島国体開催延期】

1946 年 10 月から始まった国民体育大会は、本協会も第 1 回大会から参加していたが、20 年 6 月 19 日「第 75 回国民体育大会（鹿児島県）並びに第 20 回全国障害者スポーツ大会の今年秋には開催しない」、ことを決定した。



その理由は、「新型コロナウイルス感染症（「COVID-19」）の感染拡大予防である、



本委員会は、この記者発表での資料について、次年度本大会への感染予防ガイドライン等への、「要望書」の提出を行った。

2 月 27 日、政府は「COVID-19 感染拡大予防のため、学校を春休みまでの期間休業する」ことを突然決定し、「緊急事態宣言」を発表し、「外出自粛要請」に至った。最終的には 5 月末までにおよぶ事態となり、三

密を防ぐなど「新しい生活様式」が発表された。スポーツを含め、取巻く生活環境が大きく様変わりした。

3 月 24 日、「2020 東京オリンピック」も延期となった。

JMSCA 主催の競技会も、3 月以降、すべてが「延期」となった。

国体都道府県予選会も、4 月末の調査では、4 県（一部実施を含む）のみの開催で、多くは「延期」「中止」を余儀なくされた。また、ブロック大会も延期の判断がなされた。

これらの状況から、「予選会」「ブロック大会」などの中止対応として「代表選手選考に関する通知」をそれぞれ行った。

この間、委員会として強く求めたことは、

- ① COVID-19 感染拡大予防を施したうえでの、選手/関係者の理解が得られる選手選考と情報の共有
 - ② 概ね 8 月中旬までへの、選手選考の「延期」。（本大会申込み締切りまでに開催）
- しかしながら、COVID-19 感染拡大予防の側面は否めないものの、「延期発表前」に東北、九州ブロックで「大会中止」が決定されるなど、足並みは乱れた。

なお、第 73 回福井国体からリハーサル大会となった「日本学生スポーツライミング対校選手権大会」も、中止となった。

世界に蔓延した「COVID-19」、一日も早い収束と、コントロール可能な環境下での国民体育大会開催を願うばかりである。

さて国民体育大会のこの 10 年、第 63 回大会（2008 年）から従来の縦走競技が「ボルダリング競技」となり、競技普及に力が注がれ、さらには本協会名称の改称にともない、国体競技名称の「山岳からスポーツクライミング」に、そして規定の IF ルール化へ加速した。

【競技施設の常設の推進】

第65回千葉国体

常陸宮同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、競技会が開催された。



今年は、リード競技が屋外開催ではなく屋内常

設施設での開催であったため、天候に左右されることなく行われた。ボルダリング競技は、今年から成年男子予選の2課題あたりの競技時間が6分となり、全種別の予選と決勝が6分間で争われた。またチームの順位付けも、昨年までの「2名の個人順位の合計」から「2名の個人成績の合計」に変更され、観客にも競技結果がわかりやすくなりました。トレーナーの帯同をアイソレーションや宿舎について認めるようにし、各班の終了通告について放送をもって代えるように規則改正を行った。

女子総合参加得点「0」点が、2県あった。

第66回山口国体

2011年3月11日、東日本大震災が発生し、この年の国体に「東日本大震災復興支援」のメッセージが加えられ、哀悼の誠を表した。

競技会場の山口県セミナーハウスには、09年に行われたアジアユース選手権



で使用された国内でも屈指のリード競技壁が常設であり、その運営経験が大いに発揮された。リード競技では、アイソレーションから競技場まで、「ワゴン車での選手/監督の移動」が行われた。ボルダリング競技では、競技場での空調管理のため、大型発電機による室温対策が講じられた。残念ながら、女子総合参加得点「0」点が1県あった。

第67回ぎふ国体

「2020東京オリンピック」追加競技として、最終8競技にノミネートされたスポーツクライミング。ますます注目度が上がり、マスコミの取材熱も最高潮に。競技初日、台風17号が直撃。前日開催した監督会議にて、気象予報から競技変更「リード競技での、予選・決勝の一本化での実施」を提案し、了承された。その結果、種目別順位はもとより、天皇杯、皇后杯順位も決定することができ、選手/監督、主管岳連、岐阜市実行委員会や宿舎等多くの皆さまの協力なくしては大会の開催はあり得ませんでした。女子総合参加得点「0」点が1府2県あった。

第68回東京国体

大会初日の夜半から寒気が入り、大気が不安定となり、夜中から雨が降り始め、2日目まで終日降り続いた。今大会から、同じ種別の選手2名の競技中ユニフォームは上下衣とも統一するように規則が変更となった。また、監督は日体協公認指導員資格の義務化が図られた。(特例措置により次大会まで猶予)ボルダリング競技決勝の競技方法が変更になり、昨年までの決勝進出全チームによる決勝第1ラウンド、上位4チームによる決勝第2ラウンドという方式から、決勝進出全チームが決勝の全ての課題



を
トラ
イし
て順
位を
決定
する
方式

に変わった。決勝進出全チームが全ての課題をトライできることで、より実力を発揮できるようになった。選手/監督の宿舎（池袋）から競技場へは、電車での移動となった。

女子総合参加得点「0」点が、1県あった。

第69回長崎国体

総合開会式で、原田朝美選手（少年女子）が、栄誉ある炬火最終ランナーとして出場した。その夜、台風が日本列島を通過し、大村市実行委員会、長崎県岳連はその対応に奮闘した。

会期中は一転、汗ばむ秋空のもと県立大村高校（リード常設）、大村公園で競技会を開催した。リード競技決勝では、成年女子、少年女子は同グレードとなった。ブロック大会で、残念ながら「参加資格違反」が発生し、その結果、本競技会出場を逸したチームがあった。今年も、女子総合参加得点「0」点が1県あった。2年連続である。引続き、ブロック大会への出場を指導することとなった。

第70回わかやま国体

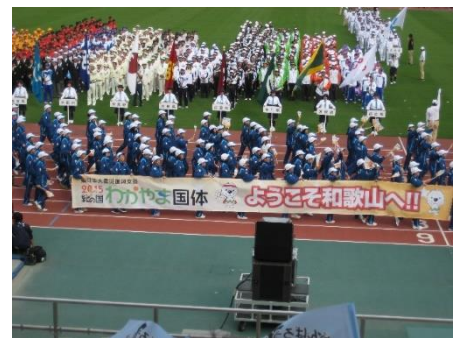
大会開催直前の9月、「2020東京オリンピック組織委員会」が、「スポーツライミング」を追加競技とする発表があった。そのため競技への注目は高まり、三笠宮寛仁親王妃信子妃殿下のご観戦、鈴木大地・スポーツ庁長官（就任2日目）、原博美・日体協国体委員長（当時）をはじめ、延べ13,700余人の来場者で会場は埋め尽くさ

れた。中学生チームの活躍も目覚ましく、5チームあり会場を沸かせた。リード競技施設は常設で県立南部高校に、ボルダリング競技施設は仮設で町立南部小学校に設置され、大会終了時に、みなべ町長のご英断で旧清川中学校に移設され、競技普及・強化の拠点施設となった。今年も、女子総合参加得点「0」点が、1県あった。

第71回いわて国体

東日本大震災の影響で、一度は国体開催がとん挫の危機に直面した。県民の皆さまや盛岡市、岩手県山協の尽力で開催することができた記念すべき大会であった。競技会初日には、高円宮憲仁親王妃久子殿下のご観戦を賜り、光栄にも「檜崎智亜選手が優勝したスポーツライミング世界選手権を徹夜で観戦」のお言葉を賜ることができた。

2日目、降水確率100%の中で気温が低くアイソレーションへの



暖房、コールゾーンへのストーブ配置などの対応を行った。リード競技施設は、常設では東北地方ではじめての本格的施設となり、今後の活動に期待が寄せられた。その後、スピード、ボルダリング施設が整備され、東日本の一大拠点となった。

第72回えひめ国体

大会直前の台風の影響で、会場地には避難勧告等が発令されるなど、苦難な中での大会準備が進められた。大会二日目は降雨でも、既存のリード競技施設に雨天対策施設が追加で敷設され、支障なく競技は進行的だった。ボルダリング競技は、既存ウォールを隣接の西条市西条西部体育館に移設し、観客席に立見エリアを採用し観戦に配慮し

た配置を行った。大会後、「東京オリンピック」で採用されたスピード競技施設が設置され、国内有数のスポーツクライミング競技施設となった。

第73回福井国体

池田町立池田小学校、中学校において、高円宮絢子女王殿下のご臨席を拝し、開催された。今大会も2日目、台風の接近予報で、計画輸送や従来の競技運営に拘らない



柔軟な対応を、地元岳連/町実行委員会の協力のもとに

実施した。選手/監督は、競技会場に到着すると、すぐにアイソレーション・ゾーンには入らず、競技エリア以外での待機を容易とする「リラックスタイム」を設定した。予選はすべてフラッシングとし、リード競技予選では、チーム同時スタートから個別スタートでの時間短縮を図った。人口3千人余の農村地域での開催であったが、池田中学校補助員、地元のみなさんのエネルギーが、大会成功に導いた。

なお、同町にはスポーツクライミング3競技のトレーニングができる、「農村 de 合宿キャンプセンター」が宿泊施設とともに整備された。今後の活用に、期待したい。

成年男子で不参加チームがあり、JSPOより苦言が伝えられた。ブロック大会不参加県が、三種別合計で1府9県に及んだ。

第74回茨城国体

東京オリンピック代表選手に内定している野口啓代選手が、総合開会式で出場選手を代表して「選手宣誓」を行った。競技会では、高円宮承子女王殿下のご臨席を仰ぐなど、令和の幕開けに相応しいスポーツク

ライミング競技会となった。

リード競技では、前年の福井国体の経験を活かし、予選はフラッシュ方式、決勝はオンサイト方式へ変更となった。また、競技ユニフォーム上衣に、「都道府県を表す文字又はロゴの表示義務化」が図られた。しかしながら、監督会議でこれらの改正点を知らない監督がいたことは非常に残念であった。

「競技規定の研究」（共通規定第18条）に違反する事例である。監督資格義務を、「JSPO公認スポーツクライミングコーチ資格」への「山岳」からの変更が求められるようになった。猛省を求める。

ボルダリング競技決勝では、多くの観客が殺到し安全のために、「会場への入場規制」が行われた。



これらの熱気を受け、会場地の鉾田市では両競技施設が新設されるにいたった。

女子総合参加得点「0」点が、1県あった。

【ルールのIF化で価値を高めよう】

振り返ってみると、全国での国体開催はそれぞれのドラマがあり、地元岳連/実行委員会のみなさまの協力がなければ成しえなかったことが、走馬灯のごとく蘇ってくる。近年の国体は、常に天候に左右され一喜一憂の薄氷の運営である。競技規定において、「ただし、当分の間、やむを得ず屋外に・・・」条項を削除し、積極的に屋内競技施設整備

を推進したいと考えている。

競技施設の設置（恒久化）は、地元の熱気、盛り上げが大きく寄与していることは否めない事実である。

本委員会は、リード競技ウォールの、可動壁規定の撤廃やフラッシングの導入など、国体の IF ルール化によってその価値をさらに高める努力は惜しまず、４７都道府県とともに歩み続ける決意だ。